

相生市立図書館

図書館ゆうびん YA向け

2024年 秋号



〒678-0053 兵庫県相生市那波南本町11番1号

TEL 0791-23-5151

夏休みは相生市立図書館をたくさん利用してくれてありがとう！

思索の広場や学習室では、中高生が勉強している姿をよく見かけました。これからもマナーを守り、みんなが気持ちよく図書館を使えるよう協力をお願いします！

NEW

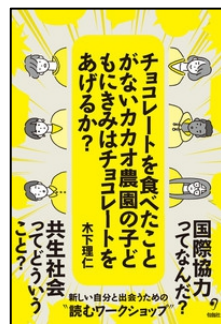
YAコーナーに新しく入った本

NEW

『チョコレートを食べたことがないカカオ農場の子どもに』

きみはチョコレートをあげるか？』木下 理仁//著 旬報社 333

カカオ農園の貧しい子どもにチョコレートをあげるべきか？ 児童労働で作られた洋服を着るべきか？ 外国人の転校生に校則違反だからとピアスを外すよう注意するべきか？ 国際協力と多文化共生をテーマにした“読むワークショップ”。さまざまなディスカッションを通じて、新しい自分を発見できる本。



『今日、僕らの命が終わるまで』アダム・シルヴェラ//著 五十嵐 加奈子//訳

小学館集英社プロダクション 933-シ

真夜中0時過ぎに、その日死ぬことを予告するサービス「デス＝キャスト」が普及した世界。死を告げられた二人の少年、マテオとルーファスは、最期の時を共に過ごす相手を見つけるアプリ「ラストフレンド」を通じて出会う。内気な性格で自分の殻に閉じこもっていたマテオ。家族を失い、とある出来事から里親からも引き離されてしまったルーファス。やり直したい過去や、いつか叶えたかった夢。様々な想いを胸に、二人は最期の日をどう生きるのか？

『あの星が降る丘で、君とまた出会いたい。』汐見 夏衛//著 スターツ出版 F-シ

中2の涼は転校先で大人びた同級生・百合と出会う。涼はなぜか百合を懐かしく感じ、惹かれていく。しかし告白を決意した矢先、彼女から75年前の戦争にまつわる驚くべき話を聞かされる。それは百合の悲しい恋の記憶でもあった。好きな人に、忘れられない過去の恋があったら、それでも思いをつらぬけるだろうか？



映画化された『あの花が咲く丘で、また君と出会いたい。』の続編。



読書週間がやってきました。今年の標語にならって、相生市立図書館スタッフのおすすめの本から、さらにおすすめの一行を紹介します。心に残る「この一行」、繰り返しページを開きたくなるような「この一行」と出逢えますように！

この世があまりにもカラフルだから、ぼくらはいつも迷ってる。
どれがほんとの色だかわからなくて。どれが自分の色だかわからなくて。 p.187

『カラフル』 森 絵都//著 新潮社 F-6



人は誰しも良い面も悪い面もあわせ持っているのだから、一つの面だけで決めつけず、色んな面があると認めることができれば生きやすくなるのかな、と考えさせられた言葉。

お米の一生は、なんだか、
人の一生に似ているのよ。

p.190

『生きるぼくら』 原田 マハ//著 徳間書店 F-8

米作りを通して、前向きな気持ち、大切なことを教えてくれる。

「ひと粒のお米には7人の神さま」も心に残る。



『5000 キロ逃げてきたアーメット』 オンジャリ・Q・ラウフ//作 久保 陽子//訳
学研プラス (Gakken) 93-7

日焼けしなくても小麦色のこの肌が、わたしは好きだ。
見た目がわたしとちがう人も好き。
世の中がみんな同じだったらつまらないよ。 p.240

だれとも違う自分を大切にすること。誇りを持つこと。



『ポプラの秋』 湯本 香樹実//著 新潮社 F-1

先のことはわからないから、とにかく生きてみよう！

きっとまた、いい日が来る。

だって私、まだ生きているんだから。 P.212

『ストロベリームーン』 芥川 なお//著 株式会社すばる舎 F-7



病気で入院中の主人公・萌^{もえ}の日記には、恋人日向^{ひなた}との出会いが書かれていた。メッセージのやり取りやデート、赤い満月「ストロベリームーン」を見に行ったこと…。しかし日記の後半は、萌から日向へのメッセージとなっている。自分の病気を知りながら、日向を思いやれる萌は、なんてすばらしい人間なんだ！と感動しました。



もしも私がいなくなったら
私の事忘れてくれていいんだよ。 P.273

『ゴースト』 ジェイソン・レノルズ//作 ないとう ふみこ//訳 小峰書店 93-レ



「自分という人間からは逃れられない。だが、なりたい自分に向かって走っていくことはできる。そういうことだ」 P.215-216

中学一年の少年キャスは、父親に銃^{じゅう}を向けられ、家から逃げだした過去がある。足の速さから自分でつけた呼び名はゴースト。陸上チームに入った彼は、チームメートとの関係を通し、自分の才能と弱さに向き合っていく。

『ペンギン・ハイウェイ』 森見 登美彦//著 KADOKAWA F-モ

他人に負けるのは、恥ずかしいことではないが、
昨日の自分に負けるのは恥ずかしいことだ。 P.5



住宅地^{とつじょ}に突如現れたペンギンをめぐる SF ファンタジーから、主人公アオヤマ君（小4男子）の言葉。4年生でこんなことが言えるなんて…。森見作品の少年はひと味違う。

『明日への勇気が湧いてくる広告コピー』 パイインターナショナル 674



自由は、ひとりになることじゃなくて 誰^{たれ}といても自分でいられること P.20

この本の中にはタイトル通り、勇気がわいてくる一文がいっぱいつまっています。眺めているだけで前向きな気持ちになれます。



スポーツの秋の「この一行」！



『八秒で跳べ』坪田 侑也//著 文藝春秋 F-7



「不調のときは、成長できる最大のチャンスだ」 P.279

春高バレーの予選まであと数日というところで、けがをしてしまった景に顧問の杉内先生がかけた言葉。絶好調の時は、他人の助言など耳に入らないことがある。不調の時こそ原因や対策を考え、己を見つめ直すことができる。これはスポーツ以外にも当てはまること。

『オン・ザ・ライン』朽木 祥//著 小学館 91-7

恐ろしいほどの感動が、俺を圧倒した。

魂の輝きがもし目に見えたとすれば、きっと俺はそれを見たのだと思う。

瞬くように過ぎ去るからこそ、二度と戻れないからこそ、

このきらめくような瞬間はかけがえのない一瞬だった。 P.103

活字中毒の侃は貴之に誘われて高校からテニスを始めた。いつも涼しい顔をしている貴之が、人知れず早朝から自主練をしている姿を目撃した侃の感動を描いたシーン。作者朽木さんの文章はいちいちカッコよくてしびれる。

『スピン』ティリー・ウォルデン//著 有澤 真庭//訳 河出書房新社 726

動きのひとつひとつが出来を左右する

ひとつのミスで心がぐらつく

だがひとつ成功すれば新たなエネルギーが生まれる

プログラムはただか3分 けれど毎回永遠に思えた P.217



フィギュアスケートのチームに所属しているティリー。競技中、氷上にたった一人で立ち、360度全方向からの視線を感じながら演技する緊張感を表した場面。カッコよくない。美しくもない。「挫折」といえるほどのドラマもないまま夢をあきらめた十代の女の子たちをリアルに描くグラフィックノベル。

『バスケの神様』木崎 菜菜恵//著 集英社 F-キ

月並みな台詞だけど、仲間を信用するんだ。 P.144



試合に勝つことにこだわり、チームメイトとすれ違ってしまった郁は、高校でもう一度バスケに挑戦する。人にも自分にも厳しい郁は「バスケより先に人間関係を学べ」と笑う先輩たちに見守られながら、バスケの楽しさとチームプレーの心地よさを再発見する。